

軍事・歴史・政治・経済研究紙

MONTHLY DAITOH-NEWS

本紙の年間購読は本体3,000円+税です。



赤い貴族達の欺瞞の民主化運動

中国と言ふ民族国家

天安門事件は、我々の記憶に未だ新しい。

一九八九年六月四日、北京で二度目の六四運動が起った。世に言う天安門事件である。

この時、トウ小平(Deng Xiaoping)文化大革命中批判を受け、二度にわたり失脚、四人組逮捕後復活、中国の最高実力者となり、改革開放政策を推進、一九〇四(一九九七年)の指示で動いた人民解放軍の武力鎮圧で、学生や市民に多くの犠牲者が出た。しかし一方、外国に逃亡した狡猾な民主化運動の指導者もいた。

この時、うまく逃れたのは敵家棋、万潤南、ウルケシらであった。彼等はパリで民主化運動の民主中国陣線(民陣)を組織した。中国共産党に政策の改善を求める彼等は、民陣を通じて北京政府に迫った。最初彼等は共産党を批判する急進的な民陣(中国民主団結聯盟)を「反革命分子」呼ばわりして、痛烈な攻撃を加えていた。

ところが北京当局から、民陣は裏切り者の反革命集団である」と決めつけられた一九九二年の頃から、民陣と合従策に臨み、民陣と合併して中国民主聯合陣線を組織した。

民陣は一九八〇年、アメリカで組織されたアメリカ系中国人の民主化を推進する支援活動組織で、民主化運動の黒子を演じて、機関紙「中国之春」を発行していた。そして民陣と合従策をとったのである。

中国民主聯合陣線のメンバーは、中国の民主化を真剣に考えている活動家もいたが、多くは幼い時から共産党の土壌で育った活動家達であった。彼等は「闘争」と

「無神論」で厳しく教育された中国人であり、人倫よりは、政治略に基づいて行動する活動家であった。そして中国民主聯合陣線は内輪もめが絶えず、これまでの民陣時代に発行していた「中国之春」は民陣に乗っ取られ、ここを飛び出した民陣の旧幹部達は、方励之、王若望、于大海、胡平らを旗頭にして、新たな「北京之春」を発行する事になった。

民族(nation)と言ふ同族意識を保持する人々の集団は、文化の伝統を共有することによって歴史的に形成されてきた。民族解放運動の起り方は、植民地・従属国などの被圧迫民族が、大國からの支配や干渉を排除して、独立を遂行しようとする運動であり、特に中国大陸では日本帝国主义との闘争があり、また、第二次大戦後にはアジアやアフリカで顕著に見られた。



しかし中国の民主化運動は民族解放運動の名を借りた、人種や国民の範囲とも必ずしも一致しない特異な一面が氷山の下に隠れていた。「民主化運動」と言えば実に聞こえの良いものである。しかしこうした民族解放運動の名を借り、黒子とした暗躍する集団の幹部は北京政府の中枢をなす国家安全部と手を握り、中国の民主化運動を内部から攪乱する大に成り下がる人間も少なくないのである。

人類は歴史の中で、「民主化」なるものを押し進めて来た歴史を持つている。この運動は市民革命として十八世紀から十九世紀にかけて起った。しかし民族単位で考える意識を放棄したわけではなかった。民主化という美名は、時として民族運動の起爆剤として使われた事もあった。

民族国家は、国民国家(nation state)とも置き換えられ、国民の単位に纏められた民族を基盤として形成するものである。この国民国家は国民が近代市民社会を営む上で民族を基盤にしてつくられた。十八世紀から十九世紀にかけて、特にヨーロッパでは市民革命を経て国民単位の統一国家が形成されて行く。国民的一体性をもって、国民の自覚の上に成り立った国家である。

この典型的なものがフランス革命であった。この時、はじめて歴史に市民革命を経て統一国家が成立している。しかしこうしたものが、成立する場合も、あるいはこうした成立を阻止する場合も、必ず背後には暗躍する穏やかな集団の影がある。天安門事件の際、中国にも、影で暗躍する穏やかな集団があった。それは意外にも、民陣や民陣の中にいたのである。

中国での民主化運動が天安門事件に発展し、やがて鎮圧されて下火になると言うシナリオは、実は民主化運動の指導者達が描いたものであった。民主化運動を指導する指導者達は金銭や権力にも結びつかない、こうしたものに嫌気がさし始めた。

また政治プロカーとして、故国から独立して運動を展開する活動家になるだけの度胸もない。そうしなければどうなるか。仲間を売る以外にない。指導者である彼等は、民主化運動で得た知名度を利用して、「利用価値」という資本で、北京当局の国家安全部と手を握り、次々に仲間を売り渡して行ったのである。第一回目は一九七六年四月五日、天安門広場で民衆による周恩来首相追悼をめぐって起きた騒乱事件だった。

奇蹟を起こす『聖書』の実体 (その四十七) 米國イオンド大学教授 曾川和翁

検査結果を重視する現代医学科学技術の発達には医療現場にもその恩恵を齎した。しかし、その恩恵は多くは、病名を特定し、検査する医療技術の面のみに限られる。したがって現代医学に従事する多くの医者は、医療技術の検査方法やその検査の結果から得られた数字との睨み合いで、患者を診ず、数字を診るといふ現実がある。これこそ、現代医学が不完全帰納法によって確立された仮説であると言つ最たる証拠となる。患者の病気を治すには、必要十分条件を充たさなければならぬからである。

「人間は永遠に生きる」といふ(予定説) 人間にはあり得ない。人間は永遠に生き続けるといふ教義を本心に信じる欧米人は多い。一方日本人はこれと反比例する。「永遠に生き続ける」という主張の裏付けに「人間は生まれながら死ぬと言つが、それを實際にどうやって実証した者が居たのか」と、「人間死亡説」に反論する。

「人は死ぬと言つが、では何を以て「死」とするのか」とクリスチャン・サイエンスは反論する。かつての人が、死んだと言つたところで、では、何を以て死とするのか。あるいは「死」といふ実例を並べてみたところで、「人は死ぬ」という命題はあくまで特称(全体の中で、特にそのものだけを指して言つこと)命題に過ぎず、これを宇宙法則と決めつける事は出来ない」と反論する。不完全帰納法から誘導された現象を「死」と云っているだけなのであつて、これが全称(全体の全範囲を指す。したがって例外を認めない)命題としての「真」であるとは言い難いとするのが、彼等の意見である。

九州科学技術研究所 URL http://www3.ocn.ne.jp/saigouha/ 大東流霊的食養道HP www.daitouryu.com/syokuyou/ 癒しの杜の会HP www.daitouryu.com/iyashi/ 九州科学技術研究所 093(962)7802 FAX093(961)8224 Eメール: science@daitouryu.com